論文審査の結果の要旨

氏名：青　山　美　樹
博士の専攻分野の名称：博士（総合社会文化）
論文題名：　道徳基盤に関る構成要素と行動の志向性・傾向性の関係性についての検討　―日本人を対象とした調査から―

審査委員：（主 査）　　教授　　田中堅一郎　㊞

（副 査）　　教授　　島田めぐみ　㊞　　教授　　和田　万紀　㊞

論文審査要旨
１．本論文の構成
本論文の構成は、以下の通りである：

序論
道徳的領域の考え方
道徳基盤理論とは何か
6 つの道徳基盤領域
モラル・ファンデーションズ・クエスチョネア（MFQ）
日本語版モラル・ファンデーションズ・クエスチョネア（MFQ）
モラル・ファンデーションズ・ビネット（MFVs）
研究 1　MFQ の概念構造の検証
目的
方法
調査 1　2016 年調査
調査 2　2018 年調査
調査 3　2020 年調査
研究 1 の考察
研究 2　MFVs の作成と概念構造の検証
目的
調査 4　予備調査
調査 5　翻訳版 MFVs の検証
調査 6　改訂日本語版 MFVs の検証
調査 7　改訂日本語版 MFVs の検証（2 回目）
研究 2 の考察
研究 3　道徳基盤と政治的志向、個人志向／集団志向
目的
方法
研究 3 の結果
研究 3 の考察
研究 4　道徳基盤と個体の志向性・傾向性
目的
方法
調査 8　援助規範意識と道徳基盤
調査 9　公正感受性、公正世界観念と道徳基盤
調査 10　国民意識（ナショナル・アイデンティティー）と道徳基盤
調査 11　嫌悪感受性と道徳基盤
研究 4 の考察
総合考察

研究の限界と今後の研究課題
利益相反の開示について
引用文献
付録

２．本論文の概要

本論文は、道徳基盤理論の考え方に基づき、これまで提案されていた複数の道徳的価値から説明される概念構造について、日本人を対象として検証するとともに、道徳性の構成要素をとらえ、さらに道徳基盤を個体の志向性や傾向性の観点から説明した。さらに本論文では、その構成概念をとらえる日本語の調査票を作成し、その妥当性について検証していくことも試みた。

研究 1 では、道徳基盤理論の構成概念について検証した。2016 年（調査 1）、2018 年（調査 2）、2020 年（調査 3）の 3 回にわたり、日本人を対象とした調査から、道徳基盤理論で想定されている概念構造（すなわち、保護（Care）、公正さ（Fairness）、内集団への忠誠（Loyalty）、権威への敬意（Authority）、神聖さ（Sanctity）の道徳基盤領域）が、日本人においてもみとめられるかどうかについて考察した。研究 1 の結果、探索的因子分析では、いずれの調査においても道徳基盤理論において想定されている 5 因子をとらえることはできなかった。2 因子に指定して因子分析したところ、第 1 部の Sanctity の項目が予測されていた第 2 因子ではなく、第 1 因子に負荷を示したり、第 2 部の Care や Fairness の項目のほとんどが、いずれの因子にもはっきりとした負荷を示していないなど、米国の先行研究とは異なる結果が示された。確認的因子分析では、想定した 5 因子構造の適合度は他の因子構造に比べて相対的に最も適合度が高かった。

研究 2 は、モラル・ファンデーションズ・クエスチョネア（MFQ）では十分にとらえられなかった道徳基盤理論の構成概念をとらえるため、モラル・ファンデーションズ・ビネット（MFVs）の日本語版を作成し、その構成概念妥当性の検証を行うとともに、日本人に適した新たな MFVs でとらえられた道徳的判断領域の構造がどのようなものであるかを検討した（調査 4 から調査 7）。研究 2 の結果、最終的に構成概念および外的基準の妥当性を有する調査票として、28 項目からなる日本語版 MFVs が提案された。そして、日本人の道徳的判断の基準として、Care, Autonomy, Liberty, Loyalty, Sanctity の 5 つの因子が示された。

研究 3 は、道徳基盤における 2 つの上位概念 Individualizing Foundations と Binding Foundations から、個人の政治的志向（イデオロギー）が予測できるとする主張が、日本人においても同様にみとめられるかどうかを検証し、合わせてこれらの 2 つの上位概念と、個人の独立的／協調的、個人主義／集団主義への志向との関係性について検討した。研究 3 の結果、日本人においても、2 つの上位概念から個人の政治的志向（イデオロギー）をある程度予測することができることが示された。しかし、先行研究の結果と比較して、日本人の個体差は小さく、Sanctity の領域への依拠も米国人とは異なる傾向を持っている可能性が示された。また、2 つの上位概念から示された個人の傾向性は、単純な個人／集団への志向から説明できるものではないことも示唆された。

研究 4 は、道徳基盤領域のそれぞれについて、影響関係にあると考えられる志向性や傾向性との関係性をとらえ、それぞれの道徳基盤の概念が含有するより詳細な内容を説明していくことを目指した。まず、個体の援助規範意識と、道徳的判断の関係性が検討された（調査 8）。弱者救済や返済意識の側面から、Care の概念を部分的に説明していたが、他の領域とも関係性を示し、単独で一つの領域を説明しているとはみなされなかった。次に、個体の公正感受性や正当世界信念と、道徳的判断の関係性について検討された（調査 9）。公正感受性も、加害者や第三者といった側面から、特に Care の領域に最も強く影響していたが、相関が高いと考えていた Fairness の領域では、予想に反して明らかな関係性は示されなかった。正当世界信念では、いずれの道徳基盤領域とも相関は低く、道徳的判断において正当世界信念は関係性の低い因子であることが示された。次いで、愛国心／ナショナリズム（国家主義）と道徳的判断の関係性について検討された（調査 10）。愛国心／国家主義と特に深く結びついていたのは、Loyalty のなかの歴史（history）の下位概念であった。日本のデータでは歴史（history）の概念が道徳的価値のひとつとしてとらえられており、これが日本人に特有である可能性もあると考えられた。最後に、嫌悪の感受性と道徳的判断の関係性について検討された（調査 11）。嫌悪の感受性は、Sanctity の概念を説明する因子として想定していたが、Sanctity よりも、むしろ Loyalty や Authority により深い関係性を示していた。道徳的判断において、汚染を回避することに対する価値よりも、集団を維持することに対する価値により高く依拠している日本人に特有の観念である可能性もあると考えられた。

３．本論文の成果と問題点

本論文での成果は以下のように集約される：

（１）当該論文が、これまで日本でほとんど知られていなかった道徳基盤を測定するためのモラル・ファンデーションズ・ビネットを邦訳し 28 項目からなる日本語版モラル・ファンデーションズ・ビネットが示され、その信頼性と妥当性を検証したこと。

（２）当該論文での研究結果が、単なる先行研究の追試という意味だけでなく、道徳基盤理論が唱える道徳性の文化的広汎性という観点から、日本人における道徳的価値の構成概念としてとらえられる点を示したこと。また当該論文の結果が、道徳基盤理論のさまざまな議論に一つの反証を提供することにつながる可能性を示したこと。

（３）一連の調査の分析結果から、道徳基盤理論の概念構造として、MFVs から Care, Autonomy, Liberty, Loyalty, Sanctity の 5 領域がとらえられ、これが米国人とは異なる日本人に特有の道徳的判断の基準となっている可能性を示したこと。

（４）当該論文で、道徳基盤と政治的志向（イデオロギー）との関係性が示され、そのなかでとりわけ Sanctity の領域に対する依拠のパターンが米国人とは異なっていることが示されたこと。この結果は、日本人の平均した集団への志向も、道徳基盤領域への依拠において、米国人とは異なる傾向を示すことを示唆している。また、それぞれの道徳基盤領域は、愛国心や嫌悪感受性といった志向性や傾向性から説明されうることが示され、道徳基盤の下位概念によってより詳細な説明が可能になることも示された。

一方で、本論文にはいくつかの問題点が認められる。

まず、11 回もの調査実施を以てしても、日本版モラル・ファンデーションズ・ビネットや、併存的妥当性検証のために用いられた日本語版モラル・ファンデーションズ・クエスチョネアでも、当該論文の中心課題であった６つ（あるいは５つ）からなる道徳基盤理論の構成概念が十分再現されなかった。

また、日本人のデータを用いた当該論文では、アメリカでの道徳基盤理論に基づく研究結果と比較すると、「リベラルー保守」の政治的志向によってモラル・ファンデーションズ・クエスチョネアの尺度得点が異なっていなかった。この点について、個人主義ー集団主義志向の違いから論考されているが、そもそも日本で「リベラルー保守」でこの尺度得点の差異が小さかったのはなぜなのか。あるいは、「リベラル―保守」次元でこの尺度得点に大きな差があるのはアメリカだけの特徴なのだろうか。これらの点についての論考が見出されなかった。

このように、当該論文の分析結果はこれまで道徳基盤およびモラル・ファンデーションズ・クエスチョネアについて示された分析結果を支持しない、いわゆる「ネガティブ･データ」が多くを占めていた。このような分析結果は新奇性を有しているが、どうして異なった結果に至ったかについての説明に説得力が乏しいといわざるをえない。

さらに、日本の心理学界でもここ数年間に道徳基盤およびモラル・ファンデーションズ・クエスチョネアについての研究が進んでおり、当該年度においてもいくつかの研究成果が学術論文や書籍で公開された。当該論文は本来であれば言及されているはずの日本における道徳観あるいは道徳基盤に関する研究成果に触れておらず、日本の研究動向についての文献研究が十分に行われていたかどうか疑問が残る。

さて、既述のように本論文にはいくつかの問題点や不十分な点が残されてはいるものの、それらは本論文の学術的成果の価値を損なうものではない。本論文での論文提出者の試みは十分に達成されていると思われる。

以上のことから、ここに審査員一同は、本論文が当該分野の研究に寄与するに十分な成果を挙げたものと判断する。よって、本論文は博士（総合社会文化）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以　　上

令和３年　１月　２３日